

大嶋伸雄（編著）

作業療法カウンセリング

関 啓 子

（三鷹高次脳機能障害研究所，所長）



三輪書店から待望のテキスト『作業療法カウンセリング』が出版された。東京都立大学大学院の大嶋伸雄先生（編著）のグループの現役 OT 等による大部の書籍で、執筆陣の熱い思いが伝わってきた。さすがに分厚く重いので携帯するわけにはいかないが、手元に置いて、事あるごとに開くべき一冊である。

かくいう異職種の者がおこがましくも書評を書かせていただく理由は、評者を「主体的に活動し、自分の言葉で主観を語る脳卒中経験者のセラピスト」として大嶋先生が認めてくださったからではなかろうか。詳細には言及できないが、評者なりに理解した冒頭部分の要約とコメントをもって書評に代えさせていただきたい。

本書 31 ページに記載の興味深い簡易調査によると、脳卒中により片麻痺をきたしたクライアント（CL）に、「あなたのリハビリテーションは誰がやりますか？」と訊いたところ、68%が「医師、OT、PT 等がやる」と回答し、「自分が主体的に行う」と回答したのは、わずか 5% のことである。そんなに受け身でどうするのだろうか？ 皆、治りたいと願ってリハをするのではなかろうか？

評者の場合、全病期を通じ、復職を目標に、麻痺した利き手のリハに励む毎日であった。ここには、まさに大嶋先生の前著のタイトルの『患者力を引き出す作業療法』が必要であった。結果的に、

評者の患者力が十分だったおかげで、早期に現職復帰できたと考えている。通常、脳損傷者の職場復帰は極めて困難といわれ、発症後 10 カ月という超短期間での大学教員への復帰は希少なことから、

当然ながら、OT は CL と同じような疾病の経験がなく、症状について当人がどう感じているかを理解できない。評者の病氣仲間が口癖のように言う「わかってほしい」という言葉は空しい。なぜなら、セラピストは自分ではないのだから。しかし、両者のギャップを埋めるものとしてコミュニケーションがある。23 ページには CL とのコミュニケーションの大切さに関する記述がある。運動麻痺や感覚障害等、さまざまな症状への CL の気づきを聴くことは、臨床上で極めて重要と思う。それらは評者が授業や講演等で常々述べていることでもある。CL としての主観を語ることを経験したセラピストとしての評者の気づきがいかに重視されているかが理解できる。

第 1 部では日本人の思考特性から始まり、その行動特性（集団指向）が順に述べられている。評者は国民性の違いを揶揄した「エスニックジョーク」を思い起こす。これは、沈没しそうな豪華客船の船長が、国籍が異なる多数の乗客の国民性に合わせ、早く海に飛び込むよう表現を変えて説得するジョークである。たとえば、米国人に対しては「飛び込めばあなたはヒーローになれる」、英国人に

は「あなたは紳士になれる」、ドイツ人には「これは規則である」、日本人には「みんなやっている」という具合である。

日米の国民性の違いとして、主体性が挙げられている。確かに「米国人は主体性があり、積極的」な一方で、「日本人は主体性の片鱗があるが、周囲を気にして横並び意識が強い」のは明らかである。そこで、医学モデルが凝縮された米国生まれの作業療法ではなく、主体性を出しにくい日本人の国民性に合った作業療法を適応させるのが作業療法カウンセリングであるという。このカウンセリングは他のリハ職種にも必要と思われる。たとえば、PT 領域でも ST 領域でも、「治りたい」と願う CL は存在するが、完全回復は困難である。そして、「治らなければ、生きる意味がない」等の狭い価値観に囚われてしまいがちである。なぜなら、「自分にできることは自分でできるかぎりやってみよう」という広い価値観は、自ら気づき、新たな行動を生み出すはずだからである。

このように、作業療法カウンセリングと周辺のカウンセリング技法は、日本人 CL の思考を促通し、気づきを促すことができる。本書が OT だけでなく PT や ST の臨床に役立つものとなることを期待したい。

〔 B5 判 352 頁 4,500 円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕